

平和体験研修

中学生の 平和体験作文

岡谷市では、8月4日から6日まで、「平和体験研修」として、市内4中学校3年生の代表20名を広島市へ派遣し、平和記念資料館の見学、被爆体験者の講話聴講、平和記念式典への参列などを行いました。

新しい時代に生きる生徒たちが、人の命の尊大さを考え、人間がつくり出した最大の悲劇である核戦争の悲惨さを知り、社会や家庭、学校・学級生活における身近な問題の解決に努めながら、人権の尊重と真の民主主義や平和の在り方を考え、21世紀を「平和の世紀」にする努力を続ける契機にしてほしい、との願いから実施しています。

ここに、生徒の体験作文・林市長の平和への誓いを掲載しますので、家庭などでの話し合いの参考にさせていただきたいと思います。

あなたが大切な人に来る事、それは何ですか。大切な人と一緒に居られる時間はほんの少しだけ、その間自分には何が出来るのか、今回の広島平和体験学習をきっかけに、僕はその答えを見つきたいと思っていました。

研修に行き、どの体験もすごく心に残っているけれど、僕は特に一日目の被爆者体験講話研修が印象に残っています。被爆者の中園さんの言葉はこの世のどんな美しい言葉よりも人を魅了させる力を持っていると感じました。助けを求める人に手を差し伸べられなかった事が今でも悔やまれるとおっしゃっていました。そして僕たち出来ることは、隣の人から愛する”ことだと教えてくださいました。それまで自分に無かったとても大事な気持ちだと思えます。それは忘れたくても忘れられないほど強く、僕の心に響きました。

「愛する」と言葉は簡単に言えますが、実際そう簡単に出来ません。しかし僕たちには「ありがとう



岡谷東部中学校
はま濱 ひろまさ 将

「奇跡とつながり」
出逢いから



私は今回の研修で命の尊さを改めて教えてもらいました。でも残念ながら、今の世の中には、人の命を簡単に奪ってしまう人が後で自らの命を投げてしまう人が後をたちません。

私が好きな詩の中に、「命が疲れたというまで精一杯生きよう」という言葉があります。原爆で命を亡くした人、被害を受けた人のためにも、これから平和を訴え続けるためにも、私はこの命を大切に、命が疲れたというまで精一杯生きよう、後の世代に明るい未来が訪れるよう、平和を訴え続けたいと思います。

平和への誓い



岡谷市長
林 新一郎

修学旅行以来、40年振りに訪れた広島は、どこまでも広く、澄みわたる青空と、被爆という悲惨な過去をみじんも感じさせない整然とした街並みが私を心地よく迎えてくれた。被爆当時をそのまま忍ばせる、焼けただれた原爆ドームの姿が心に重いことを除けば…。

そんな広島に再び足を踏み入れたのは、毎年8月6日、原爆死没者への追悼とともに、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現を願い開催される「広島平和記念式典」への参列のご案内をいただいたからである。

最初に訪れた「広島平和記念館」では、原爆投下による凄惨な光景が強調された40年前の展示内容とは少し異なり、無論、核兵器、戦争がもたらす悲惨さを訴えることを基本にしながらも、大戦に至った経緯など日本を含めた世界の社会・経済情勢に視点を当て、史観的立場からの容易な解説とともに、戦争の罪過を解き、世界恒久平和

に向けての情報発信基地として、明確にシフトしているように思えた。

こうした平和への切なる願いを込めた運動や式典が、ここ広島をはじめ日本各地、全世界で展開されているにもかかわらず、核兵器の拡散、増殖の現実は一向に収まらず、新たな核開発をめざそうとする不穏な動きがあることは、憂慮すべき、極めて由々しき事態と言わざるを得ない。

戦後60年、被爆後60年とは言え、被爆者には依然として放射線による健康への恐怖が存在しており、戦いがいまだに終わっていない事を改めて強く実感した次第である。心身の傷は永遠に癒えることがないので核兵器の恐ろしさである。

20世紀は戦いの時代と言われ、迎えた21世紀は、自然環境の保全と戦争のない平和な世紀をめざすとのアピールであったはず。自然環境の荒廃、破壊を助長し、人類滅亡の危機に瀕する核兵器の拡散、あるいは行使に至るといった愚行は何としても阻止することに、人類の生き残りをかけて、全世界の英知を結集する時である。

核兵器の廃絶、不戦を誓うべく運動を今こそ、核兵器の恐怖を体験した唯一の被爆国、日本から全世界に発信し、真の平和社会の招

来を我々日本人は命題として持つべきである。

記念式典の中、秋葉広島市長は原爆犠牲者の御霊に向かい、「安らかに眠ってください。過ちは繰り返しませんから」と平和宣言の結びとされていたが、この言葉が、ずっしりと重く、今も私の心に鮮明である。一緒に参列していた、次代の平和を担う、岡谷市内4中学校の生徒諸君をはじめとする多くの若いみなさんが、どうこの言葉をとらえ、そしてこの式典をどう受け止めたのか、少し気になりながら、そつと会場である平和記念公園を後にした。

「過ちは繰り返さない」
と心に誓いながら…。



国境のない世界



岡谷西部中学校
さとう しゅんじ
佐藤 駿次

僕は8月の4日から6日まで広島
島の平和体験学習に行きました。
出発前日に広島に行つて自分ほど
んな事を学んで来ようか考えてみ
ました。そして、僕は被爆体験者
からの話を一番の資料にしようと
考えました。

出発して8時間の長い移動の後、
被爆体験者の中園芳子さんからの
貴重なお話を聞きました。まず最
初に被爆した体の写真が手元に回
つて来ました。僕はその時「あの
時いた人たちはみんなこのよう
なつてしまったんだ」と思いまし
た。そして、中園さんの話が始ま
り、原爆が落ちてからの街の中や
人々の行動を詳しく語ってくれま
した。そこで僕は四つの大切なこ
とを覚えてもらいました。

一つ目は、「まず隣の人から愛
してください」ということ。今の
日本は家族を殺してしまう等、た
くさんの事件が起きており、まだ
隣の人からは愛せてはいないと
言っていました。二つ目は「心を切
り替えること」三つ目は「植物を
育て、作る喜びを覚えること」そ

して四つ目は「やさしい心」。こ
の四つが平和につながる大事なこ
とだと覚えてもらいとても勉強に
なりました。

二日目は原爆ドームなどを見た
後、広島平和記念館へ行きました。
中には原爆ドームの模型からさま
ざまな物が展示されていました。
その中でも僕は、原子爆弾の模型
と溶けた屋根瓦が印象に残ってい
ます。あんな小さい爆弾がとんで
もないパワーを持っていると思う
と改めてこんな恐ろしい兵器は二
度と使用せず、世界が平和になっ
てほしいと思いました。

三日目は広島に原爆が投下され
てから60年目の8月6日です。僕
が平和祈念式典に出席して思った
ことは、外国人が多く出席してい
て、世界にも平和を祈っている人
がいることを知り、とても嬉しく
思いました。

二度と悲劇を繰り返さないため
にも、これから僕たちがどうして
いったらいいのかを考えなければ
なりません。忘れてはならないの
は、戦後60年たった今も原爆によ
る後遺症により苦しんでいる人が
たくさんいることです。僕は世界
の国境が無くなった時、世界の人々
も生きる喜びが感じられると思
います。二度と地獄のようなさま
じい光景を見ないように、これか
ら世界平和を訴え続け、忘れ去
られないようにしていくことが、

この平和体験学習に参加させても
らったことを活かしていくことだ
と思いました。

命を大切に



岡谷南部中学校
みづ 志
みさわ し
三 志

8月上旬、私は広島平和祈念式
典へ参加するために平和体験研修
に参加しました。私がこの研修に
参加しようと思った理由は、まだ
良く知らない戦争や核兵器のこと
を知り、これから何をすればいい
のかを考えなかったからです。
それでも戦争は自分には少し遠い
ものという考えがあったと思いま
す。

実際に広島に行つて、原爆ドー
ムや平和記念公園の中を見学した
りして、一番心に残っているのは、
やっぱり被爆者の中園芳子さんの
お話でした。中園さんのお話を聞
きながらその当時のことを想像し
てみると、何か言葉には表せない
思いが込み上げてきました。でも
中園さんや他の被爆者の方、遺族
の方々の悲しみや苦しみを思うと
今でも胸が苦しくなります。中園
さんは私に大切なことをたくさん
教えてくれました。まず隣の人が

ら愛すること、死ぬまで戦争は終
わらないこと、などです。

資料館で遺品を真剣に見つめて
いるたくさんの小さな子どもたち、
死没者慰霊碑の前で手をあわせる
外国の方々、そして式典に参加す
るたくさんの人を見て、こんなに
も多くの人が平和を願っているこ
とを知り、とても感動しました。
その時私は思いました。平和のた
めに何をすればいいのかというこ
と、それは知ることではなく教え
てもらおうことでもなく自分で考
えることなんだと。



こんな私たちにも今すぐできる
ことが二つあります。まず一つ目
は、中園さんが言っていた「隣の
人から愛すること」です。家族で
も友だちでも誰でも良い、自分
が一番大切な人を精一杯愛するこ
と、そしてその輪をだんだんと広げ
ていくことだと思います。

二つ目は「考えること」。自分
には何ができるのか、自分は何を
しなければいけないのか、考える
だけではなく実行することも大切
です。

う」「ごめんなさい」という言葉があります。それは人を愛するには必要不可欠で、感謝し間違いを認める心があれば人は人を愛せるでしょう。けれどそれが出来れば、この世にいじめや暴力等の非行があるはずがありません。多くの人が一番なものを忘れかけています。それは「心からの笑顔」だと思えます。人の親切を当たり前のよう

に思ってしまうことから、心からの笑顔を失ってしまうのではないのでしょうか？
僕はよく喜怒哀楽が激しいと言われます。しかしそれは決して大げさなのではなく、僕の周りのすべての人々が僕を少しづつ大きくしてくれていることに気付いたからです。それを気付かせてくれたのは僕にとつて大切な人たちです。ですから僕はみんなと出逢えて本当に良かったし、みんな大好きです。人は時に傷つけ合って誤解を生み、いつかは別れがやってくる。けれど出逢わなければ今の僕は無かったでしょう、まさに夢のようです。そんな大切な人に僕が出来ること、それは例えば君がもしも悲しんでいたのなら一緒に泣いてあげて、すぐく嬉しそうな顔をしていたら微笑んであげることです。そしてその時「ありがとう」と心から届けたいです。みんなも僕と同じように出逢えて良かったと思ってくれるように…。

この研修でまた少し大きくなった僕。身につけたことを、まずは文化祭での発表でみんなに平和について問いかける事から始めたいと思っています。

最後に、この研修を支え、関わったすべての人に感謝します。ありがとうございました。

平和のハーモニー



岡谷北部中学校
和田佳菜

私は、戦後60年目にあたる記念すべき今回の平和体験研修に参加させていただき、たくさんのお話を学びました。広島へ行く前には、世界で唯一の核兵器、被爆国被災地の一つ広島を、自分の目でじかに見て、なぜ人と人が争って殺し合いをする悲劇を繰り返してはならないのかを、しっかりと心に受け止め、平和の大切さや戦争の愚かさを学んで来たいと思い、出発しました。

実際に次の二点のについて思いを深めたり、感じる事ができました。

一点目は、三日目の平和祈念式典に参列した時、外国人を含め大勢の人が来られていて、これだけ

たくさんの方が平和の尊さについて考えているんだと胸が熱くなりました。広島市の秋葉市長さんは、「過ちは繰り返しませんから。」と平和宣言されましたが、それはとても重要な事だと思います。それと同時に私は、これから先、どの位の人に正しく原爆による苦しみや悲惨さを伝えていけるのかを、犠牲者の方々が望んでいるのではないかと思います。原爆投下時間の午前8時15分、「平和の鐘」が打ち鳴らされ、黙とうを捧げる時、私は心の中で犠牲者の方々に「みなさんが恐ろしく、また、苦痛な体験をされた事を絶対に後生に伝えていきます。この国だから、私だからできる事についてよく考え、二度とこんな悲劇は起こさないようにします。」と誓いました。

二点目は、原爆ドームや資料館でたくさんの方々の写真や遺品を見て、思わず目を覆いたくなくなったことや、被爆体験者の方の講話をお聞きし、心が痛んだことです。実際に被爆した物を見て、原子爆弾の威力の恐ろしさを知り、これは悪魔の兵器と感じました。講話では、「罪のない人が被爆によって大勢、苦痛の末に亡くなられ、今も「たとえ髪の毛が抜けて外見が変でも、命が助かり生きているだけでもよい。」と思つて戦争の悲惨さを伝えてくれる人がいてありがたいと思えました。「戦争は、一人の人

間が死ぬまでずっと。」と言つておられました。本当にその通りで被爆者の人の苦しみは、生涯継続していくけれども、私たちが少しでも和らげてあげることができたらよいと思つきました。



報復からは憎しみ以外何も生まれず、背を向ける事になると思つた。人を信じて、信じられてそんな人間関係を広げていくことがそが被爆者の「こんな思いを、他の誰にもさせてはならない。」という声に答えることになると思つきました。病気が治ると信じ続け、その届かなかつた願いを、今をあまり不自由なく生きていられる私たちが伝えていくことはできると思つた。私は、心ならずも死んでいかなければならなかつた人や、つらかつた家族の方々の事を分かつたので目を背けたくても、しつかりと見ました。戦争は、現実にあつたことでフィクションでないことを忘れません。平和のハーモニーを広げる努力をしていきたいと思つた。